

五、アムール川の鮮血

日本人が、女を殺した……。

私は、椅子を蹴って駆けだした。役人と、それに続く村の男たちの背を追った。

「菊池さん！」

いつの間にか傍らに、ソヒョンが並んで走っていた。

「平助、かな？」

引きつった顔で問うソヒョンの後ろから、静枝と春美が、息を切らしながら必死に着いてこようとしていた。

役人たちはやがて、道筋の村の前で止まった。十軒ほどの民家が肩を寄せ合うように並んでいる小さな集落だった。

アイゴ
アイゴ (ああ、なんてこと) !

数十人の村人たちが、ひとつの死体を囲んで泣き叫んでいる。倒れていたのは、若い女性だった。額を撃ち抜かれた死体を、夫らしい若い男が茫然とかき抱いている。

「やはり、撃ったのは、若い日本の男だって……！」

役人に事情を訊ねていたソヒョンが、険しい面差し言った。

男は、無人の民家に侵入し、家のなかに蓄えていた食料を盗んで家を出たところに、野良仕事から帰ってきた夫婦と鉢合わせした。男はいきなり拳銃で若い妻を撃ち、逃走した。亡くなった妻は妊娠していたという。

私は慄然とした。よりによって妊産婦を……。

閔妃暗殺以来、高まっている日本人への反感が、この事件をきっかけとして、一気に爆発しかねない。

イルボン
「イルボン(日本人ですか)？」

役人の一人が近寄ってきて訊ねた。密陽の警察署長だった。私が日本の陸軍中尉だと名乗ると、敬礼して、犯人の遺留品を見て欲しい、と依頼した。犯人は逃走する際、背負っていたらしい背囊(リュックサック)を落としていたという。

ソヒョンだけを連れ、私は警察署長について隣家の庭に入った。役人が、縁台に背囊の中身を並べた。汚れた下着や手ぬぐいの他は、手帳と鉛筆だけだった。

手帳を開いてみた。ページをめくっても特に何も書いていないが、旅券と一枚の写真が挟んであった。

旅券には「橋口平助」と書かれてあった。

……やはり。

思わず天を仰いだ。犯人は、橋口平助だ。

「菊池さん」

背後にいたソヒョンが、私の肩をつついた。振り向くと、彼女は、私が手にしていた写真を指さした。そこには、男女が二人、並んで写っている。

この男が橋口平助か……。

おとなしそうな面立ちだった。その隣に坐っている和服の少女は、妹だろうか。

いや……。

どこかで見た顔だ、と回想をめぐらせていた時、ソヒョンの**呟**きが耳に入った。

「ハナさんのロケットの写真……」

あ！

私は小さく叫んでいた。

確かに、橋口平助の傍らに坐っていた少女は、ハナが持っていたロケットに納められていた写真の少女——平助が井口虎吉らと旅順で陵辱したという、ハナの親友、三原ユキだった。

現場検証が終わった後、警察署長は、平助の家族である秀子と、通訳を務めるソヒョンを連れて、警察署に来てほしいと要請した。

いったん宿に戻り、春美と静枝を残して、私は秀子とソヒョンを連れて、密陽郡役所の敷地内にある警察署に赴いた。塀に囲まれた敷地内に、日本のお社やしろのような、古風な建物が並んでいる。その一棟が、警察署長の部屋になっていた。

署長室で行われた事情聴取は、呆気にとられるほど短かった。形式的に書類を整えて、早く処理したいという雰囲気だった。

だが、署長室を出ると、警官たちが多数、慌ただしく庭を歩き来していた。鋤すまわのような農具や、長い棒を持った男たちも、多数集まっている。

「あれはなんですか？」

ソヒョンを通してそう問うと、署長は、今から大規模な山狩りを行うのだ、と言った。

「あの、菊池さん」

秀子が、私の肩をつついた。振り向くと、不安そうな面差しで問うた。

「あの人……捕まったら、どうなるでございすか？」

ソヒョンが秀子の疑問を署長に伝えると、署長は、裁判にかけます、とのみ答えた。

「平助のこと、やはり、心配か？」

警察署を出て宿に向かいながら、ソヒョンが秀子に問うた。

「まさか！」

秀子は強く首を振った。

「あんな奴、とつと縛り首になりや、ええんすら！」

「きんたま、潰さないで、いいの？」

ソヒョンに真顔で問われ、秀子は叫んだ。

「きんたま潰したいのは、静枝さんと春美さんずら。うらは、そんな事せんでもええ！」
街道を歩いて、宿が近づいてくるにつれ、人の行き来が激しくなった。特に、日本人たちが集まって、ひそひそ話をかわしている。

早くも噂が広まったのか……。

釜山ならば、少数ながら総領事館護衛の名目で日本兵が駐屯している。しかし、密陽にいる百名ほどの日本人は、いわば多数の朝鮮人のなかで孤立した存在なのだ。

やがて、駅の工事現場が見えてきた。ひそひそ声は、喧噪けんそうに変わっていた。そこには、百名近い日本人の老若男女が集まっていたのだ。いくつかの集団に分かれて、喧々囂々けんけんしょうしょう議論している。

「あ、あんたか」

先ほど話を聞いた工事現場監督が、私たちに気づいて、駆けてきた。

「釜山から来た人だな。早く帰れ。ここにいると危ないぞ」

そして、

「朝鮮の女が殺されて、日本人のせいだって嘘が広まってるそうだ」

と耳打ちした。

そういう形で噂が広がっているのか……。私は暗澹あんたんとなった。

ブラゴベシチェンスクで、マラトフ大尉が殺された後、義和団のせいだという噂——こちらは真実であったが——が拡がり、今にも戦端が開かれそうになっているのと同じ事が、この地でも起ころうとしているのだ。

「みんな、これは朝鮮人の隠謀だ！」

甲高い絶叫が聞こえてきた。みると、人垣の中央で、階級章のない軍服を着た在郷軍人が叫んでいた（在郷軍人とは、階級や年数に関わりなく、一度でも軍隊に入った事のある者の呼称だが、軍隊経験を誇示して地域の名誉職を与えられている者を特にそう呼んだ）。

「俺は見たんだ！ 朝鮮の兵隊が、武器を持って右往左往していた。いずれ、俺たちを捕まえてくるぞ！」

「な、なぜ？」

怯えた眼差しで問う男に、在郷軍人は言った。

「いいか、みんな。光輝ある大日本帝国の臣民が、わざわざ朝鮮の女なんかを殺すか？」

私の傍らで、ソヒョンが息を呑んだ。眼が怒りに震えている。

互いに顔を見合わせる人々に、在郷軍人はさらに叫んだ。

「そんなはずがない！ 朝鮮人は、日本人を恨うらんでる。だから、たまたま起こった殺人事件を、日本人のせいにして、恨みを晴らそうとしているんだ！」

人々はざわめいた。

「どうしたら、いいですか！」

赤ん坊を背負った母親が叫んだ。

「苦勞してお金を貯めて、こんな土地まで来て、やっと食べられるようになったのに、なんで、そんな恐ろしい事に……」

「聞け！」

在郷軍人は、いつしか彼を取り囲んだ全員に向かって、拳こぶしを振り上げて演説を続けた。

「こうなったら、自衛するしかない。みな、武器を取れ！ 指揮は俺が取る！」

「待ってくれ！」

私は、たまりかねて叫び、群衆の間に割って入った。みんなの眼が私に注がれた。

「残念だが、日本人が朝鮮女性を殺害したのは、どうやら事実だ。私はさつき、現場を見してきた。遺留品も確認した。この工事現場で働いていたが、二日前に追われて出て行った男だ」

「え、あの金鵝きんし勲章野郎か？」

現場監督が眼を丸くした。私は続けた。

「役人が出勤しているのは、山に逃げたその男を追って山狩りをするためだ。私たちを襲おうとしているわけじゃない。実際に警察署長に聞いてきた。信じてくれ」

「おい、あんた」

在郷軍人が私に詰め寄った。

「あんた何者だ？ まさか、帝国臣民が女を殺すなんて卑劣な真似をやったと、なぜそんな嘘をつく？」

「私は、元陸軍中尉だ」

そう名乗ると、在郷軍人は顔を強張こわばらせた。どうやら、私より階級は下だったらしい。戦争が終わっても、従軍中の階級は絶対なのだ。

私は言った。

「その男は、私も知っている。内地で女性を騙だまし、金を巻き上げて別の女性とこの地に渡ってきた。しかも、その女性も捨てて、釜山から密陽に流れてきたような奴だ」

「そうずら！」

秀子がいつの間にか、私の傍かたわらで声を張り上げていた。

「その、捨てられた女ってのは、うらのことだ！ そいつのことは、うらが一番よく知っている！」

群衆は息を呑んで黙っていた。在郷軍人の扇動に乗りかけていた人々は、ますます混乱し、縫すうのように私たちを見つめていた。

「わかった。あんたの言うことに嘘はねえだろう。信じるよ」

現場監督が言った。

「だが、みんな心配でならんのだ。これから、どうすればいい？」

「私はこれから郵便局に行き、釜山の総領事に知らせる。うまくいけば、居留民保護の名目で軍隊を出してくれるだろう」

群衆は安堵の溜息をついた。だが、今まで黙っていた在郷軍人が、またわめいた。

「釜山から軍隊が来るとしても、一日や二日はかかりませぬ！」

敬語を使いつつも、在郷軍人は皆の不安を煽るあおように言った。

「それまで、どうしてろって言うんです？ おとなしく待ってるうちに、朝鮮人が襲あおってきたら、どうしてくれるんですか？」

「ちよつと、おめえ！」

秀子が、顔を真っ赤にして在郷軍人に食ってかかった。

「なんでそう、みんなを心配させるような事ばっか言うずら？ あんた、この人を信じられねえのか？」

「うるさい、売女ばいた！」

在郷軍人は怒鳴った。秀子の顔色が変わった。

「だいたい、貴様ら、なぜ朝鮮女をここに連れてきた？」

チマチヨゴリ姿のソヒョンを指さし、在郷軍人は、周囲の人垣に向かって叫んだ。

「日本人のくせに、朝鮮をかばうとは、こいつら、売国奴だ！ 血祭りにしろ！」

「なんてこと言うんだ！」

秀子は、顔を真っ赤にして在郷軍人に詰め寄り、胸ぐらを掴んだ。

「こんなちっちゃい娘を、許せねえ！」

在郷軍人の短い悲鳴が響いた。秀子は、在郷軍人の股間を蹴り上げていた。在郷軍人は、白眼を剥いて、地面に突っ伏した。身を痙攣けいれんさせ、涙が流れ出している。

「へん、ぶざまな奴！」

秀子は、腰に両手をあてて、悶絶する在郷軍人を見下ろした。

「女にきんたま蹴られて泣いてるような奴が、みんなを守るはずがねえずら！」

一人の女がくすつと笑い、やがて笑いの輪が拡がった。

「じゃあ、あんたに任せるよ」

在留日本人の間で人望があるらしい現場監督が言った。

「指示を出してくれ。あんたに従う」

私は言った。

「ともかく、この朝鮮人を刺激するような真似はやめてくれ。早く家に帰り、戸締まりをして、静かにしてほしい」

その言葉に、群衆が納得した様子は見せなかった。彼らは不安にかられて一カ所に集まった。それをまた、ばらばらになるのは、さらに不安が募るのだろう。

「どう言えばいいのか。言葉に詰まった私に、ソヒョンが耳打ちした。なるほど。」

私は顔を輝かせて言った。

「私も、山狩りに参加する」

みな、驚いた声をあげた。私は説明した。

「日本人の私が参加することで、朝鮮人たちの気持も和やわらぐはずだ。万が一、朝鮮側にお

かしの動きがあったら、すぐに知らせる」

日本人たちは納得したように家に帰っていった。ただ、扇動に失敗した在郷軍人と、その仲間らしい二人が、不満そうな顔で広場に残っていた。

私は、宿に戻って、待っていた女たちに経緯を説明した。静枝と春美は、頷きながら私の話を聞いていたが、私が山狩りに参加すると聞き、

「うらも行きます！」

「あたしも！」

と詰め寄った。秀子までもが、

「あたしも参加したい」

と言いつ出した。三人とも、平助の顔をよく知っている。闇夜であっても間違えるはずはないから、と言うのだった。

「あたしも、いく」

ソヒョンも言いつ出した。

「菊池さん、通訳、必要でしょ」

女たちの強硬な意見に根負けし、ソヒョンは通訳として、顔を確認する役として三人のうち一人だけ同行させると言った。

「ひとつもんちやくまたも一悶着あつた。静枝も春美も秀子も、自分が行くと言つてきかない。ソヒョンの提案で、くじ引きで決める事にした。足下の草を摘み、いちばん長い茎くきを引き当てた者が行くことになった。

当選したのは静枝だった。やつたあ、と喜ぶ静枝に、春美は、まあ、あんたがいちばん腕うでつ節ぶしの強そうだしね、と悔しそうだったが、青ざめた顔で黙っていたのは、秀子だった。

「秀子さん」

ソヒョンが気遣わしげに、秀子の腕を掴んで問うた。

「どした？」

秀子は答えず、しかし、その眼から涙がこぼれ落ちた。

「まだ、平助に未練があるのだろうか。」

「ケンチヤヤ嘘ウソ（大丈夫だよ）」

ソヒョンが、うなだれる秀子を抱きしめた。

「任せて」

秀子は、ぎゅっとソヒョンを抱き返した。

警察に出向き、事態を説明すると、署長は「絶対に私の命令に服すること」を条件に、渋々承知した。釜山の日本総領事館に電報を打つ手配も承諾してくれた。

私たちは、警官隊とともに、山へと向かった。

まるで、戦国時代の合戦のようだった。警官に徴発された麓ふもとの村人は、手に棒を持ち、あるいは銅鑼どらを叩き鳴らし、チャルメラを吹きながら、山道を進んだ。その背後を、洋式

銃を構えた警官たちが続く。

楽器の音で脅して獲物を追い立て、姿を現したら飛び道具で仕留める。伝統的な狩りと同じ方法だった。

「馬賊だったら、こんなこと、しない」

ソヒョンが呆れ顔で、朝鮮人の警官に悟られぬよう、日本語で呟いた。

「相手に、気づかれる、だけ」

「馬賊だったら、どうするぞら？」

静枝が問うた。和服ではなく、宿で借りたチマをはいている。前で裾が割れる和服より、山道を歩きやすいからだ。

「二人一組で山道に潜ませ、食べもので罫を仕掛ける。食べものに近づいたところを捕まえる」

とソヒョンは答えた。静枝は感心して、

「馬賊のほうが、頭ええぞら」

と頷いた。確かに、そのほうが合理的な方法だ。

ただ、密陽の警察署としては、銅鑼やチャルメラを鳴らして、大人数で凶悪な怪漢を追っている事を、不安がっている地元民に周知させ、これ以上騒動を大きくしない事のほうが優先されるのだろう。

平助を見つけられぬまま、やがて陽が西に傾き、山道が次第に暗くなった。警官も、村人も、そわそわと顔を見合わせ始めた。

「치요ん (停下来) ー！」

警察署長が叫んだ。警官も村人も、一斉に脚を止めた。署長はさらに叫んだ。

「트라가다 (帰るぞ) ー！」

警官も、村人も、ほっとしたような溜息をつき、踵を返して引き返し始めた。もう、帰るのか？

私は驚いて、警察署長に駆け寄った。署長の言葉をソヒョンが通訳した。

「虎が出る」

朝鮮の山中では、夜になると虎が現れ、人を襲う。虎に遭遇したら、まず命はない。

「部下の命を大事にするのが、指揮官の役目だろう」

そう言われ、返す言葉がなかった。

「帰ろう」

静枝とソヒョンに声をかけ、山道をくだりはじめた。

「あいつら、やる気あるんずらか？」

静枝は不満そうだった。山道を降りる警官や村人たちが、緊張から解放されて笑いさざめいていたからだ。

「同じ村の女おなが殺されたというに、笑ってやがる」

「타크론고치요 (そんなものよ)」

ソヒョンが言った。なんて言ったの？ と眼差しを向けた静枝に、ソヒョンが言った。「男、殺される。男たち、むきになる。女殺される。むきになるのは、殺された女の家族だけ」

「あんた……」

静枝は、眉をひそめて問うた。

「がきんちよみたくない顔して、ほんとはいくつずら？」

「ハナさんが、そう言ってた」

と、ソヒョンは無邪気な子供の笑顔を作った。

「口真似、しただけ」

山を下りると、すでに日は没していた。警察署長が、夕食を振る舞いたいと申し出た。

署長の屋敷で朝鮮料理を御馳走になり、辞した時には、すでに夜闇に包まれていた。

宿に近づくと、人だかりがしている。人垣から急ぎ足で飛び出してきたのは工事現場の監督だった。

「あ、菊池さん！」

監督は、寄ってきて、私の腕を掴んで叫んだ。

「大変だ、人殺しだ！」

「人殺し？」

私とソヒョンと静枝が同時に叫んだ。

「一体、誰が……！」

その時、人垣からもう一人、春美が顔を出した。私を見るなり、わっと泣き出し、静枝に駆け寄って抱きついた。

「ひ、秀子さんが……秀子さんが……」

「秀子さんが！」

私は、人垣をかきわけ、宿に飛び込んだ。

中庭に、四つの死体が並べられていた。いちばん右端に秀子が横たわっていた。寝間着の胸にべつとりと紅い鮮血が染みついている。

その隣には、秀子に股間を蹴り上げられた在郷軍人の死体があった。額を撃ち抜かれていた。他の二人は見知らぬ顔であったが、在郷軍人と同様に射殺されたようだった。

その日、私たちが山狩りに出勤している間、秀子と春美は宿で夕食を取り、早めにやすむことにした。

蒲団を並べて眠りについた頃、不意に足音が響いた。眼を開けると、二人の男たちが、戸の鍵を壊し、部屋に入ってきた。

春美は叫ぼうとしたが、背後に回った男に口を塞がれ、猿ぐつわを噛ませられ、後ろ手に縛られた。

やっと眼を覚ました秀子が悲鳴をあげた。一人の男が取り押さえようとした。秀子は、

無我夢中で男の股間に拳こぶしを打ち付けた。男が呻うめいてうづくまつたが、別の男が背後から秀子の後頭部を殴りつけた。秀子は俯うつぶせに倒れた。

秀子を殴り倒した男は、彼女を仰向けにして言った。

——よくも、仲間のまたぐらを蹴くってくれたな！

その声に応じるように、部屋に入ってきたのは、秀子が急所を蹴り上げた在郷軍人だった。まだ鞆丸が痛むらしく、腰を引き、内股で苦しそうに歩いていた。

——お前のような御転婆おてんばに、日本の婦道を教えてやる！

だが、秀子は負けなかった。今度は、仰向けになつたまま、男の肩に噛みついた。男が悲鳴をあげてのけぞると、膝を突き上げ、股間に打ちつけたのだ。

——や、やりやがったな！

入り口で立っていた在郷軍人が叫んだ。

——もう許さん、天誅だ！

在郷軍人は懐から拳銃を引き抜き、発砲した。

秀子は仰向けに倒れた。胸元から血が噴き出した。さらに在郷軍人は、春美に銃口を向けた。春美は死を覚悟し、眼をつぶった。

その時。

銃声がたてつづけに五発、響いた。人が床に倒れる音が続いた。眼を開けると、在郷軍人をはじめ、押し入った男たちはすべて、額や、胸、腹部から血を流して倒れていた。

そして、戸口のところに立っていたのは、橋口平助だった。

平助は、春美に一步近づいた。唇が震え、眼が怯えたように見開かれていた。

——なぜ、お前たちは、ここまで……。

嘎しわがれた声を振り絞るように発して、平助は、とたんに床に土下座した。

——許してくれ！

そう叫んで平助は、外に飛び出した。それきり、春美は気を失った……。

「ほんとうに、あの人がそんな事を……？」

やつと落ち着きを取り戻し、嗚咽おえんまじりに語る春美に、静枝は問うた。

「許してくれって、そう言ったんずらか？」

「ほんとうよ」

春美は答え、夜空を見上げて呟いた。

「ひよつとしたら、あの人、あたしたちがここに泊まっていると知っていて、来たのかも知れない。許してくれって言いたくて、ここに来たらあいつらが秀子さんを手籠てごめにしようとしていた。だから発砲した……」

そうかもしれない……。私は思った。

橋口がなぜ、自分が陵辱したユキの写真を持ち歩いているのかは分からないが、いずれにしても、本来は繊細で優しい男なのではないか。

そこに、警察署長が部下を率いてやってきた。現場を検分した後、今夜は、自分の屋敷

に泊まるよう言った。静枝や春美も一緒に、という事だった。

翌朝、事情聴取を受けるため、署長の屋敷を出て、一緒に警察に行くと、様子が騒がしい。役人たちが慌ただしく出入りしている。

「무슨소리예요 (なんの騒ぎだ)？」

署長が問うと、部下が耳打ちした。署長は眼を見張り、ソヒョンに何か言った。ソヒョンは驚いた顔で通訳した。

「平助が、見つかった」

「なんですって？」

「どこに？」

詰め寄る女たちに、ソヒョンは答えた。

「虎に、食べられた」

橋口平助の死体が見つかったのは、山奥を流れる小川のほとりだった。

警察に運び込まれた死体を、静枝と春美が検分させられたが、顔面は人相も分からぬほど滅茶苦茶にされ、下半身は食いちぎられていたという。二人は、嘔吐を堪えながら、死体置き場を出た。死体は全裸で、衣服も所持品も、発見されなかった。

昼過ぎ、釜山から幣原総領事がやってきた。警察署長室に籠もり、長い時間、署長と何か話し合っていた。やがて署長室から出て来た幣原総領事は、

「大変な事件に巻き込まれてしまいましたな」

と私を慰撫した。それから、

「今日のうちに釜山に戻りましょう。秀子さんの遺骸は釜山市内の葬儀場で茶毘だびにふし、葬儀を行うよう手配してあります」

と告げた。

私たちは舟に分乗し、洛東江ナクドンガンをくだって、釜山へと向かった。私は幣原総領事と、女たちは別の舟に乗った。

舟のなかで、私は総領事に疑問をぶつけた。

「あの死体が、ほんとうに、橋口平助と断定できるのですか？」

「警察は断定していました」

総領事は、軽い口調で答えた。私には、そうは思えなかった。警察署長の態度を見るに、地元民から憎まれている日本人が絡んだ騒動に、早く幕引きをしたいという意図が露骨だったからだ。

聡明な幣原総領事は、そんな私の疑問を感じ取ったらしい。

「あれが、橋口の死体であってくれなければ、困るのです」

日清戦争後、土足で踏み込むように流れ込んできた日本人への反感は、表面化こそしていなかったが、朝鮮人の間では根強くくすぶっている。そんな時、橋口平助が、朝鮮人の妊産婦を殺害した。このまま事件が解決せず、噂が拡がれば、密陽だけでなく、他の地域

でも朝鮮人と日本人との間に騷擾そうじょうが勃発はつぱつしかねなかった。

幸い、日本人にも被害者が出て、犯人の橋口は虎に食われて悲惨な末路を遂げた。ここで幕引きをするしかない。

「私は外交官です」

幣原は言った。

「外交官の仕事の第一は、軋轢あつれきを避けることです。そもそも、朝鮮は日本との国交を望んでいなかった」

明治元（一八六八）年は私が生まれた年だ。その年の暮れ、成立したばかりの明治政府は、朝鮮に国書を送って通交を望んだが、朝鮮側は国書受け取りを拒否した。日本国内では「朝鮮、無礼なり」「討つべし」の声が高まったが、結局、明治八年、日本は海軍を朝鮮の江華島に送り、砲艦で脅して日朝修好条規を結んだ。

その後、日本はあの手この手で朝鮮への影響力を強め、ついには日本を警戒してロシアと手を結ぼうとした王妃を暗殺させたのだ。

「もちろん、朝鮮と満州はわが大日本帝国の生命線です。西欧列強と伍ごしてゆくためには、ここをロシアに奪われるわけにはいかない。でもね、菊池さん……」

幣原総領事は、外交官ではなく、知的な一青年としての面差しで言った。

「どれだけ我が方に理りがあるうとも、外国人に大きな顔をされて、これを憎まない人間はいません」

「分かります」

私は短く答えた。

「私も、清との戦いくさの折り、台湾でそれを思い知らされました」

意外そうな面持ちで、幣原総領事は私を見つめて呟つぶやいた。

「あなたのような軍人さんもいるのですね」

それから、微笑みを浮かべて続けた。

「菊池さん、私の夢はね、この地球上のすべての国が、一つの世界政府の下に団結し、軍隊を全廃して、争いのない平和な世界を作ることなんです」

それから恥ずかしそうに、

「歴戦の軍人さんを前に、青臭い書生の戯ざれ言とお聞き流してください」

と俯うつむいた。私は答えた。

「それは、素晴らしい、夢物語ですな」

自分でも驚くほど、なんの躊躇ためらいもなくこの言葉が飛び出した。幣原総領事は微笑み、フランス語で言った。

「Oui, Grande Illusion (ええ、大いなる幻影です)」

釜山に着いた後、今後の方針を相談するため、幣原総領事とともに総領事館に行くと、書記官が青い顔で出迎え、幣原に耳打ちして一枚の電文を渡した。

眉をひそめて電文を読んでいた幣原は、やがて顔をあげて言った。

「戦争です」

驚く私たちに、幣原は付け加えた。

「清国政府が、八カ国連合軍に宣戦布告したのです」

その一週間後、私はソヒョンとともに、ウラジオストックへ向かう船にいた。

北京で猖獗を極める義和団から居留民を保護する名目で、軍隊を北京に集結させたイギリス、アメリカ、ロシア、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、そして日本の八カ国に対して、清国政府が宣戦布告したのは、六月二十一日。

すなわち清国とロシアは交戦状態に入った。こうなると、ブラゴベシチェンスクに駐留する数千のコサック軍団が、市内に居住する支那人にどんな仕打ちをするか、分かったものではない。彼らは、義和団にマラトフ大尉を殺されたと疑っているのだから。

それに対して、瓊瑣など対岸の各地に居留する清国軍が反応すれば、たちまち大規模な戦端が開かれる。

水野ハナが危ない……。

私はすぐに、瓊瑣へ向かう決心をした。ハナは、コサック軍団が攻めてくると予想し、聚英棧を清国人たちの避難場所とすべく備えている。少しでもハナの助けになりたかったのだ。

私は、女たちに告げた。

「今回は私一人で行く。みんなは、しばらくここに留まっていてくれ」

すると、静枝や春美は、

「うらも行ってえずら！」

「お願いします。ハナさんが心配なんです」

口々に同行を望んだ。

「だめだ」

私は女たちを説得した。

「そもそも私は、ハナさんに頼まれ、君たちを安全な場所に避難させるため、ここに来たんだ。君たちを連れて帰ったら、ハナさんに叱られる」

静枝と春美はしぶしぶ釜山に留まることを承知した。仕事先は幣原総領事が斡旋してくるようになった。だが、ソヒョンはがんとして、同行すると言い張った。

「菊池さんひとり、放っておけない。危ない。私、心配」

こうして、私はソヒョンと二人、ウラジオストック行き汽船に乗りこんだのだ。

「なあ、菊池さん」

幣原ら領事館員や、釜山に残る事になった静枝と春美に見送られ、釜山を出港した後、船の食堂で夕食を取りながら、ソヒョンは私に問うた。

「あれ、ほんとに橋口か？」

虎に喰われた橋口平助の死体は、顔も判別できず、衣服も遺留品もなかった。私が抱いたのと同じ疑問を、十二歳のソヒョンも感じたのだ。

どこまで頭のいい娘なんだ……。感嘆しつつ、私は答えた。

「分からない。ただ、そういう事になってしまった」

密陽で橋口が引き起こした事件は、地元の新聞にも記事にならなかった。外交問題になることを恐れた幣原総領事が手を回したのだろう。

「そういうもんかな」

ソヒョンは、夕食のカレーライスをスプーンですくって口に運びながら言った。

「静枝さんも、春美さんも、信じてたみたいだから、それでいいのかな」

橋口平助への復讐心に燃えていた二人は、平助が虎に喰われて死んだことで、憑きものが落ちたようだった。春美は、こう言った。

——平助さんが、許してくれて言ったのは、あたしにだけ言ったんじゃないと思う。

静枝さんや秀子さん、殺しちゃった朝鮮の女のひと、みんなに謝りたかったんだよ……。

私もそう思ったが、ソヒョンは違った。

——静枝さんも、春美さんも、優しいな。

二人に聞こえないように、ソヒョンは、険しい面差しで私に向かって呟いた。

——ハナさんは、絶対に、許さない。

「菊池さん」

ソヒョンに呼びかけられ、私は回想から現実に戻った。ソヒョンは、カレーライスを食べ終わり、満足そうに椅子の背にもたれながら言った。

「ハナさんに会えたら、ほんとのこと言う？ それとも平助死んだって言う？」

ほんとのこと、とは、虎に喰われた平助とされる死体が、本当に平助かどうか、確かめようがなかったという事のようにだった。

「ソヒョンは、どっちがいいと思う？」

そう訊ねると、ソヒョンは即答した。

「ほんとのこと言う、いい思う。というか……」

ソヒョンはにっこり微笑んで言った。

「菊池さんの嘘、ハナさん信じる、わけない」

苦笑いするしかなかった。その通りだ。

船がウラジオストックに到着した後、私はホテルで一休みし、日本総領事館に顔を出した。伊東大尉は、私の顔を見るなり言った。

「すぐに、ブラゴベシチェンスクに向かってくれ」

「何かあったのか？」

伊東大尉は、険しい面差しで答えた。

「コサック兵三人が殺された」

「まさか……」

また下手人は義和団の……？ 私は息せききって問うた。

「犯人は？」

「わからん、ただ、その手口が残忍でな」

「というと？」

「三人とも、鞆丸を潰され、男根を切り取られて口に詰められていた」

おぞましいが、聞いたことがあるやり口だ……。

そうだ。台湾。

東洋鬼！

そう罵って、憎悪の眼差しを向けた少女たちの面差しが脳裡に甦った。

日清戦争時、台湾に出征した私は、ある村で、三人の台湾人少女が銃殺される所を通りかかった。一人の日本兵が、鞆丸を潰され、切り取られた男根を口に詰め込まれて殺されたので、上官が軍法会議なしに報復しようとしたのだ。

「しかも、だ」

伊東大尉は続けた。

「死体が発見された場所で、マラトフ大尉が殺された時と同様に、赤い服を着た背の高い支那女が目撃されている。」

「では……」

私は息を呑んだ。伊東は私の質問を遮った。

「犯人が紅灯照ホンデンアウヂョウかどうかは、もはや問題じゃない。そういう噂が広がった以上、ロシア側が報復に出る可能性が高まったということだ。一刻も早く、ブラゴベシチェンスクへ向かってく。船の手配はすぐにする」

翌日、私とソヒョンは、伊東大尉が手配した汽船に乗り、水路一五〇〇キロ北西にあるブラゴベシチェンスクへと向かった。到着には十日かかる。

汽船に乗りこんでいるのは、ほとんどがロシア人だった。軍服姿の者が多い。あとは少数の朝鮮人のみで、支那人はいなかった。

アムール川の兩岸には、ところどころに、ロシア軍と清国軍の部隊が屯し、互いを監視しているようだった。清国は北京で、ロシアや日本を含む八カ国に宣戦布告した。日本陸軍の予備役中尉である私はロシアの味方であり、清国から見れば敵ということになる。

まだ、北京では本格的な戦闘は起こっていない。北京に駐在する八カ国の軍隊は全部合わせても数千。清国正規軍や二十万といわれる義和団には太刀打ちできず、一方の清国側も、装備が格段に優勢な八カ国連合軍に手出しせず、膠着状態にあるようだった。

このまま、戦端が開かれま終わるのではないか、という観測もあれば、新たに八カ国が派遣する部隊が北京に到着するまでの小康状態に過ぎぬと見る者もいる。私は後者を望んだが、こればかりはどうにもならない。

ハナの言葉が思い出された。

——あたしは、劉春燕を疑いもせず、馬賊に紹介してしまった。放っておけないんだ。
——ロシア軍相手に、あたしがどれだけできるか分からない。

——しよせん馬賊の手に負えるもんじゃない。ここをいざという時のための避難所にしたし、馬賊たちに近くに待機してもらい、ロシア軍が押し寄せたら、なるべく避難民を保護するよう頼んだ。あたしができるだけの事はやった。

そう言つて、ソヒョンや静枝、春美を朝鮮に避難させてほしいと、ハナは私に頼んだ。その私が、ソヒョンを連れて瓊瑋へ戻る事を、ハナが歓迎するかどうかは分からない。だが、どうしても向かわずにはおれなかった。

私もソヒョンも、あまり話もせぬまま九日が過ぎ、十日目の朝、船はいよいよ、あと二時間ほどでブラゴベシチェンスクに着くまでになった。

「なあ、菊池さん」

舷かたはたに並んで川岸を眺めていたソヒョンが問うた。支那服ではなく、白い半袖上衣に、胸から足首まで覆う紅色のスカートという、ウラジオストックで手に入れたロシア少女ふうの服を着ている。

「瓊瑋へ、行けるかな」

「なぜだ？」

「ウラジオストック出でからずっと、ロシアから清国に渡る船、ない。清国からロシアに渡る船、これも、ない」

そうか……。ソヒョンの十二歳とは思えぬ観察眼に舌を巻きつつ、この汽船はロシア籍であり、瓊瑋には寄らない事を思い出した。ブラゴベシチェンスクに上陸しても、対岸の瓊瑋に渡る交通手段があるかどうか。

思案にふけっていると、隣でソヒョンが悲鳴をあげた。

見ると、甲板にいた船客たちが、一斉に舷かたはたに駆け寄り、川面を指さして、叫びあっている。

川の水面に、おびただしい数の黒い物体が浮かんでいた。よく見ると、死体だった。

それぞれの死体から流れ出したらしい血が、水面を赤く染めていた。

男も、女も、老人も、子供も、さまざまな年齢の人間の身体が、生命を失った肉塊となつて、水に漂ただよっている。

服装や顔立ちから、すべて、支那人と分かった。

何千という支那人の死体が、アムール川に流れている……。

「デユリヨグ（これからどうなるの）？」

ソヒョンが私の腕にしがみついていた。顔から血の気が引いていた。

それは、一九〇〇年七月十六日の朝だった。

その前日から朝にかけて、ブラゴベシチェンスクで三千人の支那人が、ロシア軍のコサック軍団によって虐殺された。

汽船を下りた私はソヒョンを連れ、在留日本人会事務所に向かった。市内は忙しく行き来するコサック兵であふれていた。数人の支那人を後ろ手に縛って数珠繋ぎし、連行するコサック兵の一団を見かけた。支那人たちが、私たちを見て、泣き叫びながら哀願した。

「救救我（助けて）！」

「清帮帮我（助けて下さい）！」

だが、コサック兵たちは私たちに銃をつきつけ、さっさと行け、というふうに顎をしゃくった。どうすることもできなかった。

在留日本人会事務所には、藤井青年ほか何人かの日本人が集まっていた。

「あ、菊池さん」

藤井青年は、青い顔で言った。

「よく、御無事でしたね」

支那人に間違われ、危うく連行されかけた日本人もいると言う。藤井は、事の経緯を説明してくれた。

発端は三日前の七月十三日、瓊瑋の近くを通りかかったロシア汽船が、清国兵を満載したジャンクに包囲され、停船を命ぜられた事だった。通常の臨検行為だったが、噂はたちまちブラゴベシチェンスクにも伝わった。

三人のコサック兵が無残に去勢されて殺された事件が起こったばかりだった。しかも、犯人は紅灯照、義和団の女の仕業だという噂が広まっていた。たちまち、街は緊張に包まれた。裕福な支那人たちは家財道具をまとめ、船を雇い、続々とアムール川を渡って瓊瑋に逃れた。

七月十五日、突然州知事は、支那人の渡江を禁止した。川岸に集まっていた支那人たちが、ロシア側の役人と言い合いになり、暴動寸前の騒ぎとなった。その噂が市内のロシア人たちに伝わり、さらに恐怖が煽られた。

そしてその日の夜、不意に瓊瑋とブラゴベシチェンスク、双方の砲台が火を噴いた。どちらから発砲したのかはわからない。たちまち市内はパニックに陥った。

まず、川岸に集まっていた支那人たちに、コサック兵が銃撃を浴びせた。支那人たちは川に逃げようとして次々と銃弾に倒れた。

虐殺は市内にも広がった。コサック軍団の将兵が、支那人街に突入し、片っ端から支那人を捕まえ、川岸に引きずり出して、銃殺した。殺戮は、明け方まで続いた。

私たちが、汽船の上で見たおびただしい死体は、昨夜から今朝にかけて行われた無残な虐殺の犠牲者たちだったのだ。

在留邦人は無事かどうか訊ねると、藤井青年は答えた。

「若い男性以外は、市街の北側にある日本人墓地に避難させました」

瓊瑋の清国軍の砲撃を避けるためだが、なぜか、最初の砲撃以後、清国軍は沈黙しているという。すでに虐殺の件は知っているはずだが、同胞を救出しようとする動きも見せていない。

「若い男には、なるべくロシア軍の手伝いをするように言っています」

手伝い？ 虐殺の手伝いをするのか？ 眉をひそめた私に藤井青年は、ばつの悪そうな面差しで言った。

「義和団に対して、日露は連合軍として協力しあっています。支那人殺しを手伝うわけじゃない。砲撃でロシア側に怪我也も出てますから、治療の手伝いをしたり、薬品を提供しているだけです」

「あの……」

ソヒョンが問うた。

「瓊瑋あいくんに渡る方法、ありますか？」

「馬鹿言うな」

藤井青年は、ソヒョンに対しては露骨に高圧的な態度で言った。

「無茶言うんじゃない、朝鮮の小娘が」

ソヒョンが一瞬、凄まじい眼で藤井青年を睨にらみつけた。一瞬たじろぎながら、さらに居丈高ただかになって口を開こうとした藤井青年に、私は慌てて問うた。

「マラトフ大尉の家は、まだ空いているかね」

「恐らく。ただ、市内の空き家は、コサツク兵が勝手に野営したりしていますから、保障はしません」

私は藤井青年に礼を言い、ソヒョンの腕を引っ張るようにして事務所を出た。

「ニョソク プラル ブスルクコヤ 丘丘、ハルハル 吶吶ハルハル（あいつ、きんたま潰すぞ）！」

外に出るなり、ソヒョンが叫んだ。意味がわからず彼女の顔を見ると、にっこり笑って言った。

「あいつの、きんたま、潰したい、そう叫んだ、すっかりした」

私は苦笑した。悪い男ではないが、日清戦争の勝利の頃から目立って増えている、他国民への軽蔑を隠さない日本人の一人だ。

「菊池さんや、釜山の幣原さんみたいに、いい日本人もいるのに」

ソヒョンはそう言い、私の腕を取って歩き出した。私たちは、仲の良い父子のように街を歩いた。

忌まわしい虐殺が起こったばかりとは思えぬほど、街は平穏だった。商店も開いて、人々が働いている。

ただ、以前と違い、使用人や苦力クイリとして働いていた支那人の姿が見あたらない。それに気づいて、私たちはまた、無口になった。

マラトフ大尉の家に着くと、家の前に人だかりがしていた。三人の支那人男性が、コサツク兵たちによって連行されていた。

「Постмотри（あれを、らん）！」

女性の声が響いた。見ると、殺されたマラトフ大尉の妻、リザヴェータだった。いつ、実家から帰宅したのだろうか、十歳のカーチャと八歳のペーチャ、二人の男の子を左右に

従えて家の前に立ち、連れ去られようとしている支那人を指さしている。

「Онни убил и моего отца (あいつらが、父さんを殺したの)！」

穏やかで明るい人柄だったリザヴェータの眼は、憎悪に燃えていた。

行こう……。

私は、ソヒョンを促し、歩き始めた。ホテルに泊まることにした。

「ここ、いたくない……」

歩き出すと、ソヒョンは呟いた。声が震えてみた。その眼から涙が溢れ出していた。

「早く、瓊瑋、行きたい……早く、ハナさん、会いたい……」

しやくりあげながら、ソヒョンは幾度も繰り返した。

川岸に近いホテルに部屋をとった。清国側からの砲撃を浴びる危険はあったが、それだけに部屋はがらがらだった。

二階の部屋に入り、窓から見下ろすと、アムール川を、ロシアの旗を掲げ、水兵服のロシア人に乗せた船が多数往き来していた。あの監視の眼を縫って対岸に渡るのは不可能だと、すぐに感ぜられた。

私はソヒョンと手分けし、ブラゴベシチェンスク市内の知人を回って、なんとか船を出してくれる者はいないか当たってみたが、無駄だった。

疲れた足をひきずってホテルに戻り、ソヒョンと二人、食堂で無言の夕食を取っていると、軍服を着た数人の男たちが入ってきて、ビールを飲み始めた。着ている制服から、ドイツ軍の将校だと分かった。観戦武官としてロシア軍に従軍しているのだろう。

ビールの酔いがまわるにつれ、ドイツ軍将校たちの声が大きくなった。ドイツ語はわからなかったが、彼らの言葉に、さかんに「アイグン」「アイグン」という単語が混じり始めた。

ひよつとして、ロシア軍が渡河して瓊瑋を攻める日が迫っているのではないか。

「そうだ！」

一つの案が閃いた。私は予備役とはいえ、陸軍中尉だ。日本の軍人でこの地にある者は私ただ一人。観戦武官として、ロシア軍に付き従い、瓊瑋に渡るという手があるのではないか。

私は、ウラジオストツクの伊東大尉に電報を打ち、ウラジオストツクのロシア軍に依頼して観戦武官の資格を取得してほしいと要請した。やがて、伊東大尉から、「ブラゴベシチェンスクのコサック軍団に、日本のキクチ中尉の観戦を許可し便宜をはかるべしとの電文が届いているはずだ」と知らせてきた。

私は、ブラゴベシチェンスクの軍務知事ニコラーエフ中将のもとに出頭した。

「いいところに来られた」

でっぶり太った中将は機嫌よく迎えてくれた。この男が、清国人虐殺の指令を出した張本人だと思うと、握手するのも不快だったが、笑みを作り中将が差し出した手を握んだ。

「実は明後日、渡河作戦を決行する。君も、乗船するといい」

「渡河というと、瓊瑋を攻めるのですか？」

と問うと、中将は「作戦内容までは明かせない」としながら、右目をつむってみせた。瓊瑋に渡れる……。私は心を弾ませた。日本軍の軍服は持っていないなかったので、ロシア軍の将校服を借りる事にした。ソヒョンを従者として連れて行きたいと願っていると、快く承諾し、サイズの小さな水兵服を貸してくれた。

軍服を抱えてホテルに戻り、部屋に入って足が止まった。

ソヒョンは、いつも持ち歩いているナイフを、鞣し革で研磨していた。

帰ってきた私に気づかぬほど、夢中になってナイフを研いでいた。不気味に光る刃を見つめているその眼は、かつて、井口虎吉ら阿片商の取り引き現場を急襲し、瞬時に見張り二人を殺害した時と、同じ眼差しだった。

七月二十一日、一個中隊百五十名のコサック兵を乗せた汽船は、ブラゴベシチェンスクの船着き場を出帆し、対岸へと向かった。すぐに瓊瑋を攻めるのではなく、十キロほど離れた場所に上陸した。近くに集落が見えたので、いったんそこに入り、準備を整えることになった。清国軍の攻撃を警戒しながら進軍したが、瓊瑋に集結しているはずの清国軍は、まったくなんの動きも見せなかった。村に着いたころには、コサック兵たちも気拔けした面持ちを見せていた。

村民はみな逃げている。周囲を偵察させたが、やはり清国軍の姿はなかった。中隊長は昼食のため休止を命じた。村の広場に大釜が火にかけられ、キャベツやソーセージが放り込まれた。

「菊池さん、食べよ」

可愛らしい水兵服姿のソヒョンが、列に並んで配られた昼食を運んできた。黒パンとスープだが、将校身分の私には、焼いた肉の皿が添えられていた。

私は、肉を半分切ってソヒョンに与えた。ソヒョンは喜んで食べていたが、コサック兵や観戦武官たちの奇異な眼差しが、私たちに注がれた。将校と兵士の食事に差をつけるのは、軍隊では普通の習慣だった。

ふと、兵たちの間で歓声があがった。見ると、二人のコサック兵が、山羊や鶏を担いでやってきた。逃げた村人たちが残っていたものらしい。

中隊長の許可が下りて、兵たちは山羊と鶏を割き、肉を焼き始めた。それを見たドイツの観戦武官たちは、持参したビールを並べ、陽気に歌いだし、コサック兵たちはダンスに興じた。

「菊池さん」

ソヒョンは、小声で囁きかけた。顔色が曇っている。

「どうした？」

「おかしい」

腕組みして、ソヒョンは言った。

「兵隊、来る。村人、逃げる。家畜、残さない」

貧しい村にとって、家畜は重要な財産だ。真っ先に持って行くはずなのだ。

「菊池さん、来て」

ソヒョンは立ち上がり、大騒ぎするコサック兵たちに背を向けて歩き始めた。私も、気づかれぬよう足音を忍ばせ、彼女に並んで歩いた。

やがて、村を囲む土塀の入り口が見えてきた。数人のコサック兵を見張りとして立てているはずだったが、姿が見えない。

眼を凝らしてよく見ると、入り口の門のあたりに、何かが転がっていた。半ば土塀に隠れているが、コサック兵の下半身だった。

「菊池さん」

ソヒョンは、強ばった面差しで囁いた。

「隠れよう」

私はそっと周囲を見回した。近くに、煉瓦を積んで造った倉庫があった。明かり取りの窓もついている。ソヒョンに目配せしてから、ゆっくりと倉庫へと歩いた。

倉庫のなかは空っぽだった。床に粉が散らばっているのが穀物貯蔵庫だと察せられた。確かに村人たちは、食糧をすべて持って逃げてたのだ。

「菊池さん」

ソヒョンはすでに、木の台に乗って、窓に顔を寄せ、外を覗いていた。

「ハナさん、いるはず」

「なぜ？」

「これ、ハナさんのやり方」

井口虎吉に復讐した時もそうだった。まず、ソヒョンに村の入り口の見張りを殺害させた後、静かに潜入して一気にかたをつけたのだった。

私もソヒョンと並んで、窓から外を見た。

しばらく人の気配はなかった。広場から、ロシア語の歌声や、笑い声が響いてきた。宴は最高潮に達しているようだった。

不意に、村の入り口に、支那人の男が二人、姿を現した。腰をかがめて近づき、村の内部を窺った。背中に小銃を背負っている。

馬賊か？

ソヒョンと目が合った。彼女は頷いた。

男たちは、背後に向かって手を振って合図した。村の外にある林のなかから、武装した男たちが馬を曳いて現れた。隊伍を組んでこちらに向かってくる。その数、百人ほど。

「あ！」

ソヒョンが小さく叫んだ。

「ハナさん！」

隊伍のいちばん後ろに、小柄な女がいた。
水野ハナだった。

「菊池さん」

耳元でソヒョンが囁きかけた。

「なんで、泣く？」

気がつくのと、涙が私の頬をつたっていった。

ハナは、黒いズボンに白い上衣、髪をきりりと結び上げ、背に小銃を背負った、他の馬賊たちと同じいでたちだった。澄んだ眼差しで、油断なくあたりを細かく見回しながら、静かに戦いの場へと歩いていく。時折、曳いている馬の頬ををなだめるように撫でる。馬がいなくて敵に悟られぬためだ。

貧しい生まれで、辛酸を舐めながら、数々の修羅場をくぐりぬけ、今や多くの荒くれ男たちを率いるまでになったハナ。

女の身で……。

人は、ここまで強くなれるものなのか。

ハナが、背中に右手を回して銃を引き抜き、たかだかと突き上げて叫んだ。

「突撃ー！」

馬賊たちは馬にまたがり、銃を手に、村へと突入した。

小さな村は、たちまち阿鼻叫喚に包まれた。銃声と、コサツク兵たちの悲鳴が響いてきた。

村の広場で昼食を取っていたコサツク兵たちが、どんな惨劇にさらされているのかは、倉庫からは見えない。外に出ようとも、すぐ近くの村の入り口のは、ハナが一人の馬賊を従えて立っている。大男の宋紀だ。

ふと、ハナが宋紀に何か囁き、こちらに向かって歩き出した。唇に微笑みを浮かべながら、そのままじつとしていようと言うように、手で仕草を作っている。

私とソヒョンが、ここに隠れていることを知っていたのだ。

「太太（女主人）！」

倉庫に入ってきたハナに、ソヒョンは抱きついた。ハナは、ソヒョンの背を愛撫しながら、私に笑顔を見せた。

「再会を祝したいけれど、時間がないの」

太縄を持った馬賊が倉庫に入ってきた。にこやかに、ハナは言った。

「捕虜になってちょうだい」

（つづく）